

〈研究論文〉

明治期信州宿場町商人兄弟の経済学

金 沢 幾 子

(一橋大学附属図書館)

1 はじめに

1997年の暮、1通の書簡が日本経済評論社から金沢宛に転送されました。差し出人は松林芳郎氏。『田口卯吉と東京経済雑誌』（杉原四郎・岡田和喜編 日本経済評論社 1994）の中の「『東京経済雑誌』をめぐる雑誌群」（金沢執筆）についてのコメントでした。

拙稿では、知的水準が高く向学心に燃える『東京経済雑誌』の愛読者が、雑誌記者の論理や心情を取り入れてライバル誌に対する批判投書を寄せたことにふれました。その一例として、奥宮健之編纂の『毎旬経済新誌』上の紙幣下落の原因記事に対する松林源九郎の批判投稿を取り上げましたが、その際松林姓を松村と記載した誤りが指摘されていました。

更に、書簡には、松林源九郎が芳郎氏の祖父（源之助）の兄にあたること、また弘化4年（1847）の善光寺大地震直後に建てられた信州稲荷山の生家を商業博物館として更埴市へ寄贈されること、蔵の整理のなかで明治期の経済学の専門書を数多く見つけられたことなどが記されており、「経済学」と題する1篇が同封されていました。

明治10年前後から、経済学は中学校や私塾でも教科に入れられ、自由民権運動と結びついた政治結社でも、経済学を含んだ近代西欧社会思想の学習が熱心に行われました⁽¹⁾。ここに紹介する芳郎氏の「経済学」と後に送られてきた「北海紀行」は、信州の一宿場町において、商いに横浜通いをした進取の気性に富む兄弟が、経済学の学習をどのように行ったかを生き生きと伝えています。

2 松林芳郎氏の「経済学」（一部略）

「1997年の9月、私は息子二人を連れて生家の整理に稲荷山へ行きました。その時上の子が蔵の中で古い本の前に座り込んでしまい、一日中動こうとせず困りはてました。それは、明治時代に祖父たちが入手した数多くの経済学の専門書でした。息子は大学が経済学部だったせいかわいにか経済学の古典の現物に出くわし、びっくりしたのです。それらは、当時最新の西欧経済学の名著の翻訳で、総数は百冊を越えていました。我が家にこのような本が在ることを私は知っていました。父がその一部を一時期専用の本棚に納めて飾り、祖父の思い出話をしてくれたからです。しかし、私はこれらの本は所詮ツンドクくらいかと思ひ聞き流していました。

突然、息子が蔵の中から飛び出して来ました。「お父さん、こんな本があった。」それは、経済雑誌社発行の『東京経済雑誌』でした。この雑誌は西欧経済学の日本への移植に尽くした田口卯吉によって、明治12年に創刊された日本最初の本格的な経済誌で、徹底した自由主義経済論に立ち、長期にわたって名声と影響力を持ち続けました。田口がこの雑誌の創刊を決意したのは、お雇い外国人シャンド（英国銀行家）の机の上にあった英誌『エコノミスト』を見て、日本にもこんな雑誌が欲しいと言ったところ、彼から一笑に付された時だったと言われています。

その雑誌を見ると、なんと祖父達の『寄書』（投稿）が度々載っており、息子はそれに驚いたのです。あの沢山の経済書をツンドクと思っていた私は、朱墨の落書があったり、毛筆のメモが所々に挿入されていたことを思い起こし、評価が軽率だったと反省しました。

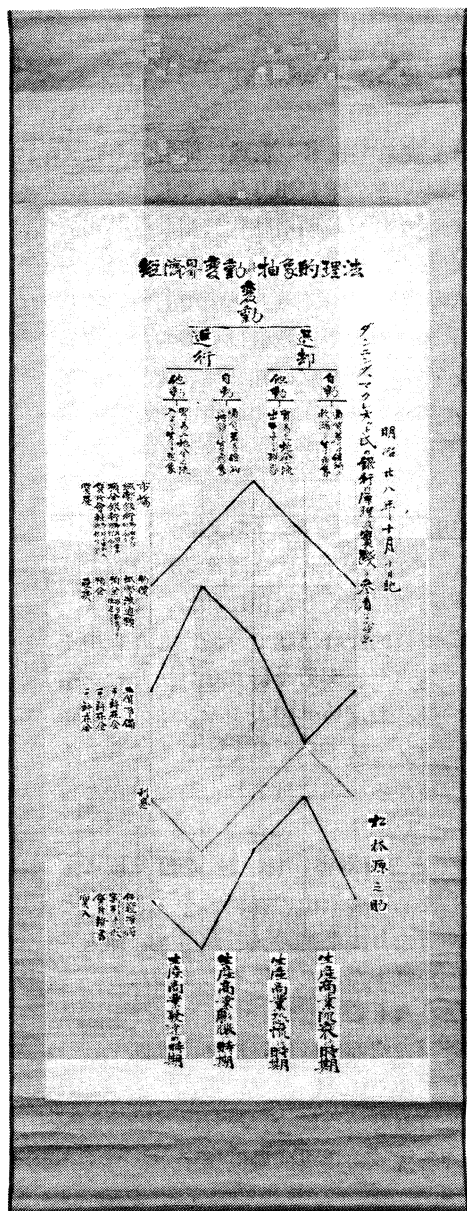
祖父達の寄書は、例えば次のようなものでした。

* 明治十九年五月二十二日号『投機商ノ砭針』松林源九郎

概要……投機は果して悪なのか。

* 明治二十四年九月十二日号『為替論之疑義』松林源之助

概要……為替論の理論式への現実的疑問提示



(図1)

源九郎の投機論は、「投機は需要と供給を調和させる有効な役割をはたす」という論点に立って6頁にわたって論述しています。これは現在の経済学でも議論され続けている問題で、例えば『為替投機は悪か』(伊藤元重『入門経済学』日本評論社)とか、あるいは今日新聞を賑わしているマレーシアのマハテル首相対ユダヤ人投資家ソロス氏の論争からも、その現代性がよくわかります。また、為替論は理論と現実との矛盾点を突き、新理論を展開しています。それは取引の手数料(特に現金の送料)の負担を売買のどちらかが持つことによって大きくなりがってくる、という観点からの議論です。経済学の大家は実際の取引には疎くて解りやすい単純な理論を作り易く、現実を無視して読者に誤解を与える危険性があることを述べています。これは、祖父自身の貿易取引の経験に基づく議論と思われ、現代のようにコンピュータネットワークが

無く最終的に現金輸送に頼る比率が大きかった時代には、特に重要な問題だったのでしょうか。

当時最新の西欧経済学を、地の果て日本の、更に山奥信州の兄弟が一生懸命学んでいた姿を想像した私は本当に感銘を受けました。大学制度など未だ無かった時代、勉強は自分でするものでした。また、祖父達には横浜での絹の貿易の経験から来る刺激も大きかったと思います。更に、当時の日本が置かれていた状況への危機感と、それを乗り越えようという意欲が日本全体に盛り上がっていたのでしょうか。祖父達は近隣町村の青年達を集めて、世界情勢や学問の話をする私塾のようなものもやっていたと聞いています。これらの書物は河上肇の『貧乏物語』で終わっていました。祖父源之助の62才の時で、死去する4年前でした。

この文章を書いてから2ヶ月後、建物寄付契約に再び稲荷山の生家へ行きました。その時、私は蔵の奥で1本の大きな掛け軸を何気なくちょっと開いてみました。そこにダンニング・マクレオットという字が見えた時、私はビックリして思わず大声をあげました。祖父の経済書を整理する為に私が最近初めて知った19世紀英国の経済学者の名であったからです。その掛け軸には『経済界変動の抽象的理法』というタイトルで、各種経済指標が景気の変動でどのように増減するかを、折れ線グラフで美しく画いていました。軸の右側には「マクレオット氏の銀行の原理の実践を参看すべし 明治二十八年十月十日記 松林源之助」と記されていました(図1⁽²⁾)。

マクレオットは経済哲学で有名ですが、日本では『銀行論』が翻訳され良く読まれていたようです。祖父の蔵書にも『銀行論』がありましたが、グラフはありませんでした。祖父はこの本を読んでその原理を一枚の折れ線グラフにまとめる事を思いつき、更に掛け軸にして床の間に掛けて考えていたのでしょうか。祖父の着想の奇抜さと斬新さに私は改めて感心しました。息子は「祖父が私塾の解り易い資料として考えついた物ではないか」と言っていました。」(松林芳郎記)

3 松林兄弟と商人の町稲荷山

『東京経済雑誌記事総索引』（日本経済評論社 1996）では、松林源九郎・源之助について以下の記事が挙げられます⁽³⁾。

・松林源九郎

読毎旬経済新誌	3 巻54号 (M14.02.25) (p181-182)
供給需要ノ疑問ヲ解ク	3 巻66号 (M14.06.25) (p589-590)
物価騰貴の原因	4 巻92号 (M14.12.24) (p1481-1482)
経済学ノ釈義	11巻267号 (M18.05.30) (p694-698)
投機商ノ砒針	13巻317号 (M19.05.22) (p656-661)

・松林源之助

為替論の疑義	24巻589号 (M24.09.12) (p402-403)
* 松林源之助氏為替論の疑義に答ふ (四谷 乾梅)	24巻592号 (M24.10.03) (p506-507)
金銀価の変動及び万国貨幣会議	26巻644号 (M25.10.08) (p518-521)

・松林哲五郎

銀行信約ノ拡張ヲ望ム	14巻332号 (M19.09.04) (p315-319)
------------	--------------------------------

松林哲五郎については、編集段階において、姓が同一、主題が似ていて発表時期も近く、源九郎と同一人物かと調査しましたが、不明のまま掲載したものでした。このたび、芳郎氏から、哲五郎は源之助の幼名で、安政5（1858）年誕生、大正12（1923）年に66歳で没、13歳違いの兄源九郎は弘化2（1845）年生まれ、大正6（1917）年に73歳で亡くなられたことも教えて頂きました。

杏の里で知られる信州稲荷山はどんな土地柄でしょうか—稲荷山⁽⁴⁾は、江戸時代には善光寺街道の宿場町の一つとして、明治期は生糸や木綿や農産物の集散地、北信第一の商業地として繁栄しました。また教育面では、幕末に備後福山から招かれた小林迎祥が塾を開いて、和漢の書から当時の海外事情まで講義し、青少年に多大の影響を与えま

した⁽⁵⁾。松林家は、江戸後期には松代真田藩の御用商人として大阪や横浜との絹・蚕種・杏の種⁽⁶⁾・茶などの広域取引を手掛けています。

源九郎の学問の素養は小林の迎祥塾の講義によって培われました。さらに維新の激動期には「商売に国境なし」をモットーに横浜へ出かけ、外国人相手に生糸・蚕卵紙の貿易に従事しました。その体験が経済書を勉強するきっかけとなったようです。商人としての気概が、新しい経済学の学びや、『東京経済雑誌』への寄稿へと実を結んだものと思われます。取引に使用した印鑑（図2）も、その進取の気性躍如たるものです。松林兄弟の経済学の勉学は、横浜と交易で結びついた商人の町稲荷山あってこそといえるでしょう。

4 源之助の「北海紀行」

源九郎が『東京経済雑誌』に投稿した前年の明治13（1880）年、松林家は北海道移住を検討しました。その事情を芳郎氏が「北海紀行」と題して以下のようにまとめております。（一部略）

「明治十三年三月十四日、一人の若者が北海道へ向けて旅立ちました。その名は松林哲五郎（後に源之助と改名し兄から家督を相続）、23歳でした。当時、当主は13歳年上の源九郎でしたが、商売の絹の貿易が相場の急変で苦しんでいました。また、明治政府はロシアの侵略に備え北海道開拓を国の重要政策として積極的に進めていました。

兄源九郎は思い切って北海道移住をしてはどうかと考え、その下見の旅を弟哲五郎に提案しました。商人の町稲荷山らしい発想で幅広い新しい選択の一つでした。哲五郎はその提案に即座に同意しました。単に松林家の進路だけでなく、視野を広げ、注目の北海道の実態を自分の目で確かめたいと思ったからです。哲五郎は、横浜へは商売でいつも往復して旅慣れていました。しかし、北海道はあまりにも遠く未知の世界であり、旅の準備には念を入れ、支配人の飯島安太郎を従者として同行させました。これが71日間にも及ぶ長い旅になるとは予想もしなかったようです。その旅の出来事と調査結果は旅日記『北海紀行』として和本に矢立で書かれ、今でも残っています。

その路程の概要は、

三月十四日 『出発』 ー上田ー追分ー本庄ー熊谷ー
 三月二十一日 『横浜着』 五日間滞在
 三月二十六日 『浦賀港出発』 三菱汽船、風雨強し、漂流、
 三月三十一日 『館山港（千葉県）へ漂着』 上陸、二日間滞在
 四月二日 『館山港発』 風雨強し、館山へ引き返す、
 五日間滞在、
 四月六日 『館山港発』
 四月九日 『函館港着』 小雪、一室蘭ー苫小牧ー千歳ー札幌
 ー石狩ー小樽ー然別ー岩内ー函館
 五月七日 『函館港発』
 五月十日 『品川港着』 七日間滞在、一板橋ー大宮ー深谷
 ー安中ー追分ー
 五月二十三日 『稻荷山帰着』

この旅は、往路の船が暴風雨で漂流する苦難に遭い、九死に一生を得た様です。しかし、哲五郎はあきらめず旅をやり遂げました。哲五郎は、北海道各地の経済の観察調査結果を箇条書きに記しています。

- 一．農業経営の実態と将来性の検討。
- 二．商売の売上高、人件費、他の経営分析。
- 三．北海道経済の内地及び外国との比較。

また、この旅日記は各所に絵を交え、アイヌ民族の風習についても記しています。この旅の哲五郎の結論は「北海道は未だ人間の住む所では無い」でした。余りにも未開の厳しい土地だったからでしょう。

この旅日記を見て感ずる点がもう一つ、それは五冊構成で、非常に合理的に整理されています。第一冊：経費之部、第二冊：路程之部、第三冊：函館之部、第四冊：札幌之部、第五冊：小樽之部。特に「経費之部」については、使った金額が全て細かく記されており、旅の姿が目には浮かびます。その興味深い高額出費を記してみます。

- 一．横浜での洋服の記念写真。 壱円
 これは当時まだ珍しく、現在でも残っています。
- 二．横浜でのドルでの買い物。 拾五円七拾八銭
 双眼鏡、時計、磁石。拾ドル五セント。
- 三．帰途、東京での経済書籍の購入。 参円五拾二銭

宝氏経済論（フォーセット）、理財原論（ペーリー）、
弥児経済論五冊（J.S. ミル）」（松林芳郎記）

金沢は哲五郎横浜上船に際し3月24日に撮った記念写真を見せてもらいましたが、傍らのテーブルに山高帽を置き、洋髪、洋装（蝶ネクタイ）スタイルの実にモダンなものでした。また、源九郎は安政年間にして早くも洋間を建て、洋服を着用していたと伺いました。

4 兄弟の活動と時代

北海道移住をとりやめた源九郎は明治14（1881）年経倫社を興し経済上の研究をなしました⁽⁷⁾。『東京経済雑誌』への寄稿はその成果とみられます。その勉学や言動から「経済博士」と評判であった源九郎は、16（1883）年には稲荷山の戸長となり、小学校建設などの公共事業、海外貿易などの産業転換策を打出しました。しかし、時期尚早だったのででしょうか、遠大な志が町の人々の理解するところとならず在職2年で退陣、その後家督を弟に譲って若くして隠居しました⁽⁸⁾。

源之助が兄の影響をうけ、商売に励みながら実学や経済書類の勉強を通して投稿活動したのが明治19-25（1886-92）年。日清戦争が終結したのもつかの間、三国干渉が始まり、朝鮮に於いては日本人壮士や軍が大元君を擁してクーデタを起すという内外の動きの中にあって、マクレオット（H.D. Macleod）の銀行理論をもとに掛け軸にグラフ化したのが28（1895）秋、源之助37才の時です。兄弟が投稿した『東京経済雑誌』を後に凌駕することになる『東洋経済新報』が町田忠治によって創刊されたのは、それからほどない11月15日のことでした。

5 「松源蔵書」

兄弟の素養と勉学の跡を示すものは「松源」の蔵書にこそ、よく現れています。横浜通いをしたため外国の経済に関心をもっていたことや、田口卯吉の経済雑誌社の『経済学講習会』テキストを購読するなどとは予想がつくとはいえ、北信の地において、よくぞこれほどの経済

学関係の書籍を集め、かつ学びえたものと感嘆します。蔵書の中に専修学校発行の教科書がありますが、同校の今の通信教育にあたる校外制度の受講生が載っている『特別認可専修学校同窓名簿』には松林兄弟の名は見当たりません⁽⁹⁾。独学の気概とともに、「松源蔵書」は、明治期の地方商人たちの実学と結びついた、最新の「学問追求」の気風を示すものでもあるでしょう。それはまた、青年達のための私塾のバックボーンとしての役割を十分に果たしたにちがいない。



(図2)

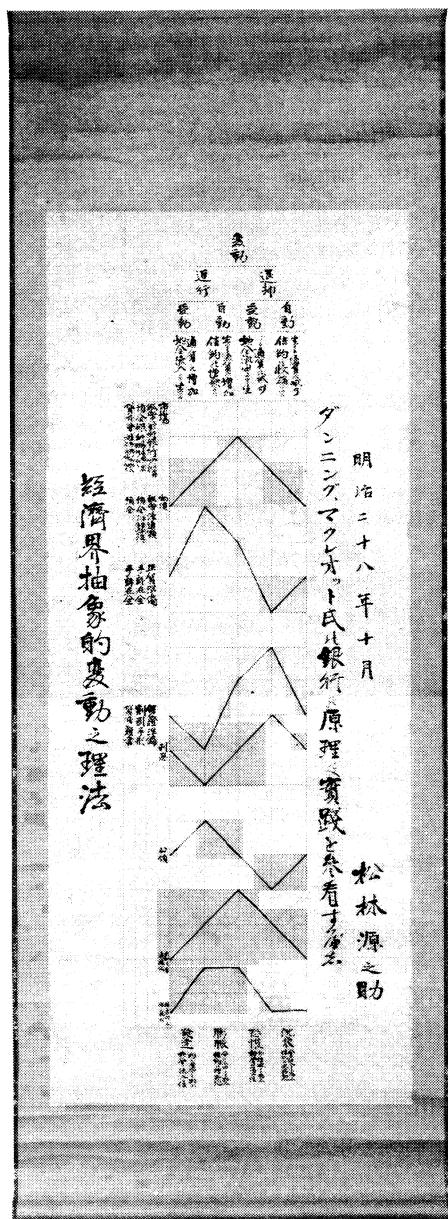
以下は、「松源蔵書 経済学 社会学」⁽¹⁰⁾です。

- ・『交易通史』一～三（上下）キイヒッツ著 杉亨二訳 柳樊斎
明治5.10
- ・『泰西経済新論』1～8 ゼームス・イー・ゾロルド・ローゼルス
著 高橋達郎訳述 文部省 明治7.3～11.4
- ・『日本外史訳解』一～十二 頼山陽著 頼復二郎関 小川弘蔵訳解
明治8.7
- ・『彌見経済論』一，二，初篇卷之三（上下）～六（上下），二篇卷之
一～九，三篇卷之一～九，三篇卷之一 林薫関 鈴木重孝訳
英蘭堂 明治8.10～18.10
- ・『人口論要略』馬爾去斯（マルサス）著 大島貞益訳 有吉三七
明治10.1
- ・『萬國商法』[レラン・レビ著 豊島住作訳 神鞭知常関] 明治10.

- 6～12.8 第1-2篇内務省勸商局，第3篇大蔵省商務局刊
- ・『理財論』ジョセフ・ガルニエ著 中山真一訳 大蔵省 明治12.5（初版：明治11）
 - ・『理財論続篇』ジョセフ・ガルニエ著 中山真一訳 明治11.5
 - ・『経済辨妄』巴士智亜（バスチアー）原著 H.W 翻訳 林正明訳述 丸家善七 明治11.7
 - ・『官民権限論』一～三 弥留（ミル）著 渡辺恒吉訳 律書房 明治12.5～13
 - ・『大英商業史』一～十七 レヨン・レヴィー著 田口卯吉識 藤田静訳 律書房，中外堂 明治12.10
 - ・『理財原論』彼理氏（ペーリー）著 川本清一訳 須原量平 明治13.4
 - ・『斯氏教育論』ハルバルト・スペンセル著 文部省訳 明治13.4
 - ・『西國立志編』ス萬爾斯（スマイルス）著 中村正直訳 明治14.10
 - ・『租税論』ポール・レルワ・ポリュー著 大蔵省租税局訳 明治15.5
 - ・『萬國進歩之實況』第一～三卷 マルホール著 伴直之助訳 経済雑誌社 明治15.6～16.7
 - ・『國債論』ポリュー著 田尻稻次郎訳 専修学校 明治15.10
 - ・『外國為替論』ゲーシェン著 駒井重格訳 専修学校 明治16.4
 - ・『惹穩氏論理新編』スタンレイ・ゼボン著 添田壽一訳 井上哲次郎校閲 丸家善七 明治16
 - ・『英國金融事情』ウォルトル・ベイジホット著 小池靖一講述 杉中平次筆記 経済学講習会 明治16.10（初版：明治16.9）
 - ・『社会学』第一卷 社会進化論，第二卷 宗教進化論，第三卷 族制進化論 ハルバルト・スペンセル著 有賀長雄訳 東洋館書店 明治16.10～17.6
 - ・『社会平権論』袍巴士・斯辺瑣（ハーバート・スペンサー）著 松島剛訳 報告堂 明治17.2
 - ・『経済要義』ゼー・イー・ケアンネス著 田口卯吉校閲 伴直之 助訳述 経済学講習会 明治17.6
 - ・『社会学之原理』第一卷第一篇（天・地）～第三篇 ハーバート・

- スペンサー著 外山正一 関 乗竹孝太郎訳 経済学講習会
明治17.3～18.4
- ・『富国論』第一巻～第三巻 亜當斯密（アダム・スミス）著 石川
映作・嵯峨正作訳 尺振八関 経済学講習会 明治17～21.4
 - ・『圭氏経済学』第一巻～第二巻 ヘンリー・シー・ケレー著 犬養
毅訳 博文堂 明治17.7～17.11 [4巻本]
 - ・『銀行論』第一巻～第四巻 ダンニング・マクレナード著 後藤博
見等訳 経済学講習会 明治17.9～23.9
 - ・『政法哲学』前編・後編 ハーバート・スペンサー著 濱野定四郎
渡邊治共訳 時事新報社 明治17.10～19.5
 - ・『経済哲学』上中下 ヘンリー・ダンニング・マクラウド著 田口
卯吉訳 有賀長雄校閲 明治18.7～20.3
 - ・『寶氏経済学』寶節徳夫人（ミッリセント・フォーセット）著
永田健助訳補 明治21.10 [初版：明治20]
 - ・『哲理銀行論』麻克朗徳（ヘンリ・ダニング・マクラウド）原著
金谷昭訳述 経済雑誌社 明治23.2
 - ・『大日本新典商法積義』一～十五編 磯部四郎著
明治23.5～24.3
 - ・『法令全書』[内閣官報局編] 明治24
 - ・『高等経済原論』ゼー・エス・ミル著 ゼー・エル・ラフリン編
天野為之訳 富山房 明治24.9
 - ・『大日本外国貿易 二十五年対照表』大蔵省主税局編 明治26.5
 - ・『日本民法講義』塙鍵藏講義 松栄堂 明治31.11
 - ・『改正日本商法通解』法律同志研究会編 明治32.3
 - ・『改正日本商法正解』磯部四郎校閲 明治32.4
 - ・『甘薯糖及瓜哇製糖論』プリンセン・ヘーリッヒ著 草鹿砥祐吉
訳補 丸善 明治41.9
 - ・『明治金融史』東洋経済新報社編・刊 明治42.9
 - ・『日本の糖業』木村増太郎著 台湾日々新報社 明治44.6
 - ・『財政整理論』小林丑三郎著 経済雑誌社 明治45.2
 - ・『中央銀行と金融市場』堀江歸一著 巖松堂 明治45.3
 - ・『世界重要商品史』東洋経済新報社編・刊 明治45.4

- ・『資本及利子歩合』 フィッシャー原著 河上肇評訳 博文館 明治
45.5 (初版:45.1)
- ・『保険事業論』三浦義道著 有斐閣 明治45.7 (初版:45.4)
- ・『台湾殖民政策』持地六三郎著 富山房 明治45.7
- ・『日本糖業政策』堀宗一著 糖業研究会 大正1.8
- ・『物価騰貴論』レートン著 増井幸雄訳 北文館 大正2.2
- ・『経済財政横議』堀江歸一著 実業之日本社 大正2.4
- ・『最近二十年間世界物価の趨勢』アール・エッチ・フーカー述
東京銀行集会所編 大正2.4
- ・『最新銀行論』堀江歸一著 同文館 大正2.5 (初版:明治37.3)
- ・『北米合衆國經濟事情』スプレーグ講義 青木得三訳註 巖松堂書
店 大正2.5
- ・『合同 (かーてる及とらすと)』戸田海市著 京都法学会
大正2.5 (初版:明治43.2)
- ・『財海時雨』田尻稻次郎著 同文館 大正2.6
- ・『貨幣ト物価』フィッシャー原著 高城仙次郎訳述 有斐閣書房
大正2.10
- ・『金ト信用ト物価』河上肇著 京都法学会 大正2.11
- ・『財政十年』山縣明七著 榎山書店 大正2.12
- ・『国民經濟學原論』グスターウ・シュモラー原著 山田伊三郎訳補
大正3.2 [9冊あり, 終刊:大正5.9]
- ・『貨幣論』堀江歸一著 同文館 大正3.3
- ・『歐州戦時の經濟財政』堀江歸一著 慶応義塾出版局 大正3.12
- ・『工場原価計算論』エドワード・ピー・モクセイ著 旦睦良訳
帝国會計協会 大正4.2
- ・『戦争ト外資』服部文四郎著 富山房 大正4.3
- ・『歐州戦後の財界と日本之将来』田尻稻次郎著 克礼堂書房
大正4.6
- ・『民法正義』法曹閣編著 大正4.10
- ・『金融の原理』高島佐一郎著 宝文館 大正4.9
- ・『貧乏物語』河上肇著 弘文堂書房 大正8.5 (初版:大正6)



(図3)

注および引用・参考文献

- (1) 杉原四郎『西洋経済学と近代日本』 未来社 1972 p.13-14
- (2) この他に明治二十八年十月(日付けなし)の掛軸(図3)が見つかった。十月十日付けの軸より縦軸項目が多く折れ線グラフも複雑である。
 なお、『信濃毎日新聞』の28年10月前後には、講演会など掛け軸の使用に関連しそうな記事は見当たらなかった。
- (3) 『東京経済雑誌記事総索引』は、人名の下に論題の五十音順に配列。ここでは年代順に並べかえた。
- (4) 稲荷山についての情報は、<http://www.naganoken.net>などのインターネットのホームページからも得られる。
- (5) 『稲荷山四百年の歩み』郷土歴史「稲荷山四百年の歩み」編集出版委員会 昭和49 p.219-223
- (6) 『杏花の里—信州・森のあんず』監修・横島章 銀河書房 昭和59 p.28, 72, 76, 83, 92, 220, 230, 247
- (7) 『稲荷山四百年の歩み』p.228
- (8) 同前 p.215, 572-575
- (9) 『特別認可専修学校同窓名簿』(明治25年5月24日出版)および『同名簿』(明治26年6月30日調)による。なお、明治期の校外生制度については、拙稿「明治期の経済学教育と講義録」(『経済資料研究』No.27 1997. 5 p.19-39で言及した。
- (10) 松林芳郎氏提供のリストに、金沢が出版社などを補記。